柏崎日報社転載許可済

（1）2022年6月2日（木）2面　掲載

◆北信越学生空手道大会　産大2選手が快挙
次のインカレへ進出

北信越学生空手道大会
産大2選手が快挙
次のインカレへ進出

第48回北信越学生空手道選手権大会（北信越学生空手道連盟主催）が新潟産大体育館で開かれ、同大の学生が健闘した。空手道部の部員はわずか2人。男子形で小川虎太朗選手（2年）が初優勝、男子組手で部長の小柳翔選手（3年）が準優勝した。2人は19日、兵庫県姫路市で開かれるインカレに駒を進めた。

大会は個人戦で男子8大学33人、女子5大学8人が出場。先月22日に行われた。男子形は7人で予選リーグ、上位2人による決勝。予選2位の小川選手は得意の形「スーパーリンペイ」で逆転勝利を収めた。小川選手は大会1カ月ほど前から体調を崩して体重が10㌔近く落ち、万全な状態にない中で「決勝は相手より演舞が後だったのでパフォーマンスがよければ優勝できると信じていた」と話した。

男子組手は26人によるトーナメント戦。小柳選手は準決勝までの3試合（1分半）は先にポイントを挙げ、試合を有利に進めた。決勝の試合時間は準決勝までの倍の3分間。一進一退の攻防を見せたが、後半離された。「体力勝負だった」と振り返る。大会実行委員長の実務も担った小柳選手。試合を振り返り、「もう一度、体力、スピードを鍛え直す」と語った。

19日のインカレ（全日本大学空手道選手権大会）は姫路市立中央体育館で。「ぜひ優勝を」と声をそろえ、意気込む。

第４８回北信越学生空手道選手権大会

男子形優勝の小川虎太朗選手（左）と組手準優勝の小柳翔選手＝新潟産大体育館

柏崎日報社転載許可済

（2）2022年6月8日（水）1面　掲載

◆産大レクチャー　ア・ラ・カルト〈176〉

感覚的な言葉の難しさ

経済学部講師　上野　るみ

産大レクチャー ア・ラ・カルト〈176〉

感覚的な言葉の難しさ

上野　るみ

「○っと目を通す」「△っと炒める」。○と△にはどんな1字が入るでしょうか。○は「ざ」、△は「さ」。「簡単！」と思われるでしょうが、これは外国人には大変難しい問題です。この「ざっと／さっと」などの語彙（ごい）を『副詞』といいます。主に動詞や形容詞を修飾する、活用しない独立語です。三つのグループがあり、「雨がしとしと降る」「せっかく来たのに」など動詞にかかり動作の状態を限定する働きをする情態副詞、「少し早く」「かなり前」など動詞・形容詞・他の副詞にかかり動作や状態の程度を表す程度副詞、「絶対に正解だ」「ぜひ行きたい」など判断・推量・感動・誘いなどを表す述語表現と呼応する陳述副詞に分けられます。

副詞は話者のものの見方・感じ方を表す言葉で、日本語力の高い外国人にとっても、その言葉の意味や類似の言葉との微妙なニュアンスの違いを理解することは困難です。語彙選択は話者の判断によって違ったら…どれを参考にすればいいのでしょうか。また、語彙数の多さも副詞の理解を困難にさせています。前出の「ざっと／さっと」は濁点があるかどうかで意味が違います。「ぞっと／そっと」も同様です。それだけでも難解なのに「～っと」という表現は数もかなり多いのです。皆さんはどのくらい思いつきますか。「じっと、すっと、どっと…」どんどん出てきますね。そして、副詞の最大の難点は感覚的な言葉であることです。「ほら、○っとしていなさい！」「彼は○っと立ち、出ていった」「客が○っと押し寄せた」などの問題が外国人には手も足も出ない難題なのは、その語感が分からず、状況や情景が頭の中に描けないからです。母語話者である私たちはそれを感覚的に使い分けているのです。

副詞は話者の感情・意志・判断、その場の状況、程度などのニュアンスを的確に表し、文に彩りと奥行きを与えてくれます。日本語を豊かにし、特徴づける素晴らしい表現です。しかし、一方では、外国人にとっては理解を妨げる、やっかいな表現にもなります。ですから、まだ日本語力が低い外国人との会話ではなるべく副詞を使わずに話してみてはどうでしょうか。「そっとドアを開けて」ではなく、「静かに」と言ったり、「だいたい終わったら」を「80％」と明確にしたり、「かなりいい」と言わずに「○○よりいい」と他と比較したり。簡単な言葉や具体的な言い方にすると理解の助けになり、コミュニケーション上の行き違いを防げるでしょう。それが良好な人間関係につながります。ただ、もう何年も日本にいる外国の方にはどんどん副詞を使ってください。そして、日本語の豊かさをぜひ伝えてください。

（経済学部講師）

＝毎月1回掲載＝

柏崎日報社転載許可済

（３）2022年６月10日（金）１面　掲載

◆ＡＩ活用　人材育成へ

新潟産大　新規プログラム導入

ＡＩ活用 人材育成へ

新潟産大 新規プログラム導入

新潟産大（梅比良眞史学長）は本年度、情報化社会に対応できる人材の育成を目的に、関西学院大と日本ＩＢＭが共同開発した「ＡＩ活用人材プログラム」を導入した。オンライン授業が始まっている。

プログラムは内閣府・文部科学省・経済産業省による「数理・データサイエンス・ＡＩ教育プログラム認定制度（リテラシーレベル）」の認定を受けている。文系理系に関係なく、学び初めの人にも、ＡＩ活用人材に必要な四つの必須スキルが総合的、体系的に習得可能な実践的な教材だ。メーカーや金融など約１００社が導入している。

１コマ１００分程度のオンライン授業で、学生は空き時間などに動画を視聴でき、分からないことがあれば24時間サポートのＴＡ（ティーチング・アシスタント）チャットボットが対応する。修了後には単位認定とともにプログラム修了証、オープンバッジ（デジタル認証）が得られる。

新潟産大では学部生34人、院生2人、通信課程28人の計64人が受講。このうち経済経営学科3年・浦沢瑠音さんは「これからの社会にはＡＩの知識が欠かせない。スキルアップのため用人材プログラムがあると知り、すぐに申し込んだ」とパソコンと向き合った。

当初想定20人を超える人気ぶりに、阿部雅明教授は「地方再生にもＡＩ活用が必要になる時代。学生たちもそのことを意識していると思う。地域を活性化する人材になってもらいたい」と話した。

空き時間に新導入した「ＡＩ活用人材プログラム」を受講する学生。「就活に生かしたい」と資格取得を目指す＝新潟産大ロビー

柏崎日報社転載許可済

（4）2022年6月14日（火）2面　掲載

◆地域に学び地域をおこすー実践活動レポートー

共に支え合う「地学連携」産大×高柳・荻ノ島

【新潟産業大学】

地域に学び地域をおこす

――実践活動レポート――

共に支え合う「域学連携」

産大×高柳・荻ノ島

本学は2016年6月に高柳町荻ノ島と「共に支え合う域学連携」に係る協定を締結し、19年に2期目となる5カ年協定を行っている。

同地区では、人口減少と高齢化が進む中で、農家が水田の作場をそれぞれ集約したことから、圃場（ほじょう）ごとの耕作者数が少なくなり、道路や水路の維持作業が大変になっていた。

そして、耕作者と共にこれらの作業に協力して貰（もら）える非農家の方や外部人材との連携が課題となっていた。

そこで、生活の苦しい留学生の支援と圃場の維持作業を両立する仕組みが「共に支え合う域学連携」である。

モンゴルの留学生を主体とした連携活動では、集落の持続的な農の里づくりとして、農道や用排水路、農用地の草刈り、水路の泥上げなどを地元の耕作者と協力して進めている。

また、新型コロナ禍前には荻ノ島のふれあい運動会や秋祭りの機会を捉えた交流が行われ、内モンゴル出身の蒼原烏璃吉助教と留学生がモンゴルの歌を披露し、喝采を受けたエピソードや大学の紅葉祭で開催されるモンゴル相撲に同地区から応援に行くなど交流活動もしっかり行われていた。

本年度も5月から連携活動が始まり、モンゴル留学生のバイガリさん（2年生）は「風景のきれいなところで、草刈り作業をして、気持ちがいい。地元の人たちも親切で、丁寧に仕事のコツを教えてくれて、楽しくやっている。また、地元の人に喜んで貰えてうれしい」と語ってくれた。

19年に荻ノ島から本学へ同活動にかかる感謝状をいただき、まさに『地域に学び地域をおこす』につながる継続的な活動として今後も期待している。

（同大学地域連携センター）

地元の人と共に汗を流す草刈り作業

柏崎日報社転載許可済

（5）2022年6月27日（月）2面　掲載

◆地域に学び地域をおこす－実践活動レポート－

百年企業から学ぶ～柏崎魚市場にて～

【新潟産業大学】

地域に学び地域をおこす

――実践活動レポート――

百年企業から学ぶ

～柏崎魚市場にて～

2年生の地域理解ゼミナールⅢ（企業経営分野・今村英明教授）では、柏崎の百年企業を訪問し、長寿企業の実態を探っている。その一環として、柏崎魚市場（市内半田）を訪問した。同社は、明治36年に柏崎鮮魚問屋組合として創業し、今年で114年目を迎える老舗企業だ。その会議室で同社取締役社長の片山和男さんから沿革や事業内容、今後の課題などをうかがった。

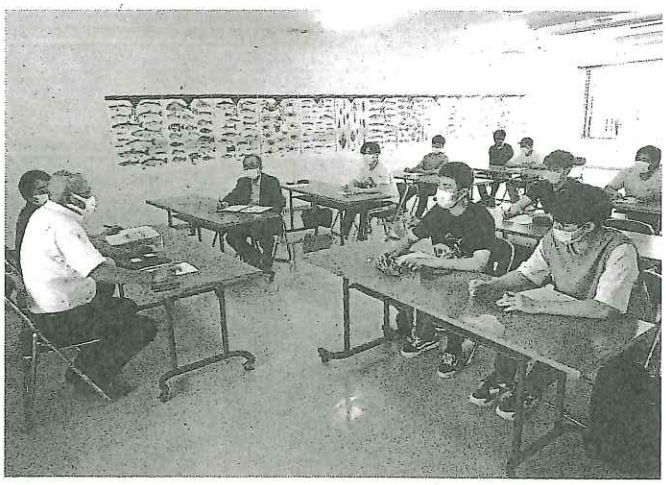
片山社長は「人口減による消費の縮小や漁獲高の減少、魚食文化の衰退など、経営環境は変わってきている。最近は生魚の割合が減少し、8割以上は冷凍物が占める。養殖の比率も高まり、大型の生簀（いけす）を持つ海外の養殖に押され気味だ」と現況を語る。

他方、同社は柏崎市と共同で完全養殖に成功したヒゲソリダイの商品化、谷根川のサケの増殖事業、柏崎のアラを市内店舗でPRするなど、地域との連携を進めている。

学生から「長い社史の中で区切りとなる出来ごとはあったか」という質問に片山社長は「中越地震と中越沖地震では、冷蔵庫の倒壊により、多くの商品が傷み、1週間競売ができなかったが、社員が一丸となって魚を精査し、早期再開にこぎつけた」ことを挙げた。

説明を聞いた栗林広太さん（2年）は、「存続するための企業努力や経営の難しさを感じた。また柏崎で販売されている魚の生産地情報をよく見ようと思った」と話す。

今春本学を卒業し、同社総務課に勤務する太田瑞希さんも見学に同席し、後輩たちを見守った。「想像した以上に学生が魚を食べていることを知った。質問も企業研究の成果か、具体的で頼もしかった」とうれしそうに話してくれた。

参加した学生は、地域に根差した企業経営の実際を学ぶ貴重な体験となった。

（同大学地域連携センター）